
地下鉄の手記

NancyBill

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

地下鉄の手記

【Nコード】

N3721X

【作者名】

NancyBill

【あらすじ】

ポエム日記です。帰りの電車でかんがえています

ゆめのなかへ（前書き）

「わたしは逃げた」

ゆめのなかへ

探しものはなんですか

それは、見つけにくいものですか

かばんの中も、机のなかも、これまでの人生も、さがしたけれど見つからないもののなに

それでも探しものはとまらない

お勤めを止めることは許されない

自由に歌って、踊って、楽しむことは許されない

そんなふうに這いつくばってまで、一体何をさがしているんですか

さがすのを止めたとき、見つかることもあるかもしれないのに

わたしたちの欲しいものは、欲しがっているときには触れることもできない

でも

夢の中ににげないで。

夢の中で踊っている人たちは、とてもやさしい人たちだけど夢の中にはにげないで。

ゆめのなかへ（後書き）

わたしの表現したいものは、99%の絶望（のようなもの）。
のこり1%が希望であつたなら、もう少し文章として収まりやすい
かもしれない

でも違う。100%でもない。ただ単に99%の絶望
わたしが主観として見ているこの世そのもの

ペニーロイヤルミルクティー（前書き）

「ペニーロイヤルミルクティー」

ペーローヤルミルクティー

チェアに座って、ゆっくりと飲む。コーヒーを。
こうしている間にも、僕の背中や腰の筋は痛み、骨は１ミクロンづつ曲がっていく。

あぐらを掻いて、ゆっくりと飲む。コーヒーを。

こうしている間にも、僕の血流はとまり、筋組織はおとろえていく。

ゆっくりとゆっくりと僕らを飲み込んでいくもの

それは大きくて、広くて、感触がなくて、色もない。

それは社会そのものじゃないか

確固たる偏見をもち、のろのろと体中でたらめに動いて、慈悲がない。

人を人たらしめているのはこれの所為だろうと思ったが、何かがひつかかる。

そんな１日でした。

ペニーロイヤルミルクティー（後書き）

サムシング・イン・ザ・ウェイ

ポエミール（前書き）

「ポエミール」

ポエミープル―

今日も澄み渡る青空のように、わたしはひとり
ふと、空を見上げてみたとき、なぜだかこう思わないだろうか

ここにはわたししかない、と

あれはきつと、心の乖離

絶望するほど空は深く、悲しくなるほど美しい

明日も敷き詰められていく雲のように、わたしはひとり
空は非情にも、私の間隙を埋めてはくれない

1人は寂しいものだけど、寂しいことはつらいことではない
2人は楽しいことだけど、楽しいことは寂しさに変わる
3人は半端なものだけど、寂しくはない。

明後日も明々後日も、わたしはひとり

ポエミィーブルー（後書き）

ふじこへミング演奏、ラプソディ・イン・ブルーな感じのBGMで。

欲（前書き）

「欲、または夢」

欲

小さな頃、わたしはテレビゲームがほしくて仕方がなかった

わたしは特別な存在で、いつか魔法が使えるようになると信じていた

わたしは英雄と呼ばれて、見目麗しく、栄華にふるまい、そして強者だった

わたしは今でもきつとこの願いを持ち続けている
諦めが同居するようになってしまったけれど

わたしは、わたしの為にゲームを買い求め続けた
数え切れないほどのゲーム機とソフト

これが現実と折り合いをつけた年少だったわたしの夢

そして今では、一生の時間をかけてもクリアしきれないほどのゲームの束

わたしは、ほんとうにこれを望んだのか。望んでいたのか

違う。これは違うと思う。

ひとつ確かなことは、これがわたしの夢でした

欲（後書き）

買い物なんてやめよう

プレゼントなんてやめよう

贈る相手がいるのなら、そんなことよりも共に過ごそう

愛しさと優しさは、物価に変換できるものでは決していないはずだ

プレパレートぼく(前書き)

「プレパレートぼく」

プレパレートぼく

どうしたの、ぼく？

ぼく？がたまらなく嫌だったことを覚えている

子供の意見は黙殺される。それは当然だけれど
大人同時の話し合いでは子供はただ邪魔なんだ。

それがとても嫌だったことを覚えている

子供の、あの無垢そうな目線がある

親の肩越しとか、車の後部座席の決してそらされないあの瞳

あの目は何も考えていないと同時に、自分の「思い通りにならなさ」
を

すくない語彙で ノノもしくは、それと全く違うチャンネルで
考えているんだと思う。

子供は、自分がどうすれば大人に喜んで貰えるかを知っている

「ほら、バイバイ」

と言われたら

「ばいばい」

と言って手を振ればいいんだ

それはこれからの少年期の大いなる増長の始まりで、誰もが通る道
だろう

女の子が、私に手を振ってきた

私は、圧倒的な偏見と確信を持って、無視した

あの不思議そうな瞳から、何が生まれただろうか

プレパレートぼく（後書き）

2年前のノートから

女の子は、もう小学生くらいかな
とても可愛かったと記憶している

Fitter雨ニモ負ケズ**Happier**（前書き）

「**Fitter**雨ニモ負ケズ**Happier**」

Fitter 雨二モ負ケズHappier

雨二モ負ケズ よく順応し

幸福を得、よい生産性。

酒は適量に押さえ、ジムで適量の運動。

同僚と気を置かず、時代に流されない。

冷凍食品と動物性脂肪を控え、適量を食す。

無事故無違反の忍耐強い性分と、チェック万全の車
チャイルドシートも忘れない。

被害妄想や偏見とは無縁で、毎日心地よく眠る。

クモを排水溝に流したりはしない。

時折旧友と語らい、大切にし

通帳の残高を確認する事と、晴れの日には

すすんで洗車をする事が週末の日課。

愛想よく振る舞い、立ち入り過ぎない。

福祉の理念を持ち、スーパーへは自転車で。

蛾にシャワーをかけたりはせず、窓から外に逃がす。

暗がりも怪談話も怯えたりしない。

誰でも十代ほど馬鹿げていて愚かで

思い出し赤面しない人はいない

仕事に精を出し、無力でも社会に関心を失わず

一員であることを心がける。

綿密に計画を立て、継続し力にする。

辛くても逃避せず、人前で涙を見せず。

健康に気をつかい

雪の日にはタイヤを履きかえる。

財布には家族の写真。

記憶力に優れていて

良質な映画には今でも感動する。

虚無感や怒りとはオサラバして
シフトレバーを切り替える。

自分に楽しみを見出し、弱者をあざ笑う能力に長ける。
良く順応し、よりよい幸福、より良い生産性。

畜生

檻の中の畜生

抗生物質漬けの畜生

そんな人間に、私はなりたい

Fitter 雨ニモ負ケズ **Happier** (後書き)

Radio Head を意識したです

サル砂漠（前書き）

「サル砂漠あるいは、緑化活動」

サル砂漠

さる教授が酒の席で、ぼそりと漏らした

「若者にものを教えるのは、砂漠に水を撒くようなものです。」

これは、なんだかものすごい表現だ。

いつもいつも社会は荒れに荒れて、猿みtainな若者の砂漠が広がっている

ずっと続いていくかもしれないと錯覚してしまう、繰り返し

それでもって、汎用と凡庸な我々は水の大切さと重々しさをよく知っている

これを読んでいる諸君と私は、さながら水はけの良い台地
さあ、お水をいっぱい飲もう。沢山の知識と経験を。

…だけど、すぐに抜けていってしまうのでした
それでいいような気もするんだけどね

腹の虫（前書き）

「腹の虫・アゲイン」

腹の虫

「腹の虫」って何ですか。それはファーストフード的現代小説風に言つとメタファーとかベーコンとか言うものですか。

「腹の虫キリギリス」は言つた。

「僕には貯蓄が無いじゃないか。アリの巣を再襲撃する。

そうしなければいけないような気になってくると、

それが正しいことのように思えるのは、なんら不思議ではない。システム化された社会は、それ自体が大きな川の流れのように、宿命といっていい程の予定調和を持っている。

僕はその縮図であり、また全体の一部である。つまり、これは僕の意味という、社会の大きな概念的流れなのである。」

「腹の虫あり」は言つた。

「その前に、君は存在するのかい？我々ありの巢公共財団の結論を言つと、確かに概念的存在は概念的なところに存在するけれど、ファーストフード的に言つて唯物論を法の指標としている。」

我々にとって、君は存在しないのだよ。それを社会の流れという存在しない概念的存在の社会の流れに乗って便乗しようとする君の行為は、愚かでしかない。君にできることと言えば、せいぜい物乞いだらう。責任を引き取つて、メタファーに押しつぶされるがいい。」

と僕の腹の虫たちは言つた。朝から何も食べていないのだ

腹の虫（後書き）

3年前の私は、もう私ではないのだろうか？

ペンのゲラタン(前書き)

「えびのゲラタン」

ペンのグラタン

マカロニグラタンは一体どこまでがマカロニでグラタンなのであるか。

それはあなた自身が定義を見出し、答えはおのずと出る。

玉蜀黍はなんと読むのであろうか。そう、マカロニグラタンだ。

名前と互換性にはそれほど関連はない。郡山駅が岡山駅に移っても、

それは岡山駅であるべきだし、番号でよんでも差し支えはない。

ただ位置が固定されているだけである。

もし僕が7C6の数列であるとするならば、7C6は僕の名前の定義である。

名前は物にではなく、その目的性による。海老のグラタンを(a)と呼んで、

パエリアを(b)と呼ぶ。

(a) = 5 6 6 6 6 6 6

(b) = 5 6 6 6 6 6 6

かもしれない。

A B 海老には、グラタンが入っていて、パエリアは何だか分からない。

互換性は、たぶんある。2 = $\int \pi$ になっても虚無である。

2、23、24、258、3444、前に進め。

だから、アウシュビッツ収容所があつたのかもねん。

哲学の義務とは、誤解によって生じた幻想を排除することにあるそれが一体何の役に立つのか分からないが、考えていたことは大体とりとめのない、そんな引用ばかりだった。

朝、起きたら私は虫になっていた。

時計を見ればもう七時半を過ぎる頃で、やれやれ、冗談じゃないぞ、もう飛行機は行ってしまったじゃないか、と思った。

一番頭に近い足は今までの手の感覚でどうにか動いたが、他の足どもは

焦点の合わないレンズみたいにもぞもぞと動いていた。

まあいい、私にも休みが必要だ、などと考えつつ、掛け布団を足（だった）の方向へ

ずらしたあとで気がついた。起き上がれないではないか。体を横に転がす必要があるが、

そうなるとベットから落ちる。この細い足どもがもげるかもしれない。

掛け布団は横に落とすべきだったのだ。

首だけがどうにか動き、腹のところにある紫の斑点を確認しただけだった。

ずっとそのままの姿勢で、私はこれまでの人生を振り返った。

そもそも私は働きたくなかないのだ。何か一つでも生み出したものの

があっただろうか。何もない、ゼロだ。いままでしてきたことといえば、

移動とただ通り過ぎることだけだ。そんなもの、人生と言えるのだろうか。

仕事は真面目にやってきたつもりだが、愛想がないので、誰の話題にも

のぼることはないし、昇進も望めなかった。レポート用紙一枚で済んでしまう

凡庸な人生だったのだ。

八時をまわる頃、まだ寝ているのか、仕事はいいのかとドア越しに妹が声を掛けてきた。

ああ休みだ、今日は休みだ、経済は自由意志を持っているよ、と返事をしたつもり

だったがそうもいかず、妹はそれきりドアから離れてこう言った

「定義を先立たせるのか、言葉から入るのか。」

死の行進と呼ぶべき追い込み残業も一段落し、家に帰ってすぐ寝床に

就くと、奇妙な夢を見た。それはアインシュタインも首をかしげるほどの

座標の乱れであり、時間軸の乱立であった。

私は向き合った二人の男の真ん中にいた。日なたに一人、日かげにもう一人。

私の視界の先には、それが三次元的に交錯していた。二人の会話を聞くことにする。

日かげの男が言う。

君は夢をみていられるのか。世界を救おうと思うほどに。

真実は誤解を生み、幻想は誤解を生み、知識は誤解を生む。

君は傲慢だ。愚かだ。何も考えちゃいない。

日なたの男が答える。

定義の問題だ、きみはたとえば認識の崩壊を意識することがあるかい。

過去に読んだ本を思い出し、自分で物語を再現すること。この意味

に
当てはまる言葉を、ここでは誰も知らない。だからきみは、いつまでも
そんな所にいて、間違った計算表をまがめているのさ。

私が間違っているだと。関係の中に存在するものに、君が判断を下すことはない。

きみが下すものでもない。きみの真理とは、わたしにとっては傲慢だ。

ではこうしよう。いつか2たす2が5になることに君が目を背けたとき、

君が構成されている証明が機能しなくなる。君は虫畜生になって、私に

永遠に追い掛け回される。そうしよう、そうしよう。

目が覚めたときに、やはり夢でも自分に似て、なんて内容がないのだろう、と思った。

んで何が言いたいのかというと、あなたが幾ばくか馬鹿にしたところの

ある他人に関り、顔見知りになったとき、それほど捨てたものでない、

と感じるだろう。他人と言うものは他人の集合体の一つとみなした代替の呼称である。

あなた	5	6	3
他人	4	7	7

と個性を数値に置き換える。一つの項目でも数値が大きければ、あなたは他人を隠れて馬鹿にする。全てが自身より劣って見えるのだ。

しかし他人とは集合体であることを忘れてはならない。

平均値というものは、計算してみれば分かることだが、

（要素a個の数値が大きいほど）予想に反して低い値になるものだ。

ペンのグラタン（後書き）

…？なんだこの文章

まともに残っている文章がもうない

私が生きてきた中でたったこれだけだった

私のじんせいは他の人よりもさらにからっぽのようだ

FOG (前書き)

「霧、Did you go bad」

FOG

冷蔵庫の野菜は

どんどんひからびていく

週のはじめに買ってきた魚は
いまや臭気がたちこめている

だけど下水道に捨てられたワニガメは
どんどん大きくなる。グロウ・アップ・ファースト

でかい魚は小さい魚を食う

優しかったばあちゃんは死んで

わが社の監査役は子会社に下った

わたしの世界は、うまくいかなかった
あなたの世界は、うまくいつているか

事象のパーセンテージは

合計100%にならなくてはいけないのに

わたしの見る世界は

それを満たしていないように感じる

うまくいかなかったのかい

うまくいかなかったのかい？

FOG（後書き）

「fog」メモリーの感じを文章にしてみた

便宜と欺瞞のすぐそばに（前書き）

「便宜と欺瞞のすぐそばに」

便宜と欺瞞のすぐそばに

今日はもう終わってしまつて、日付が変更される。

夜が払拭されてくれれば、私たちはクリアになるだろう

いつだって私たちは「あるもの」を確認し、参照する。

時間と日付は、どこからやってくるのだろうか

答えのないものを考えるのはしょうがないことだけど
無駄なことではきつとない

便宜と欺瞞を履き違えた社会は、もう長くは続かない
時間は便宜に存在して

欺瞞は人間に存在するものだから

私たちはいつまで社会に欺かれてしまうのだろう

私たちの思う便宜は、私たちの欺瞞にも変わらずに優しいままだと
いうのに

日はまた昇り、沈んでいく

枯れ葉は散り、新緑はゆかしい。

そして人は年老い、死んでいく

便宜と欺瞞のすぐそばに（後書き）

時間は人が作ったものだけど、その基は元からあるんじゃないかな

昔の情景にも色はついている（前書き）

「名利に使はれて閑かなるいとまなく」

昔の情景にも色はついている

名利が多ければ多いほど災いも多い
身を守ることすら難しくなる

そんなものならば、さっさと投げ出してしまうのも間違いではない

名利にこだわるとは、外聞にこだわることである
然してそれは見栄をはり、嘘つきのはじまりだ

結局は煩惱の積み重ねでしかなく、才能や学んだことも
その一部になっていないだろうか

善も悪も、有も無も根本は同じものであり
そんなものはないと悟るほうがよほど教養らしい。

まことの人は、知も、徳も、功も、名も、特に欲しがらない
賢しいとか愚かとか、得とか損とかいう境地にはいないのだ。

迷いにとらわれながら名利を求めることはより空しくなるだけであ
って、

その是非すら論じるに値しないことだ

昔の情景にも色はついている（後書き）

徒然草から抜粋、意識です

文字色を調整しています。見にくかったり、目が痛くなったりしたら
ご一報ください。

ダンス・イン・ザ・ロッキーチェーン（前書き）

世界を売った男

ダンス・イン・ザ・ロッキーチーン

10代の頃を思い返す

私は何と視野がなく、外聞ばかり気にして、愚かなことをしたのだろう

そんな愚かな世代は誰にでもあったということは分かっているが、なぜこんなにも人の言うことに耳を貸さなかったのだろうか

私の友達。いまではもう、私を通り過ぎて行ってしまった環境が変わるということは、友達が変わるということ

ならば友達のいない私にはもう差し出せるものが無い。

私の友達。買い取らされた男へ夢と希望にありふれた私の友達へ。

きみはアメリカに行くんだね、でも忘れないでほしい
帰るに帰れなくなり、シャブ漬けになっている私の友達がいることを

私の友達。世界を売った男へ

運動が得意で、いつも面白い私の友達へ。

きみの体は車輪の奥で見つかった

首から上はもう、見つからないだろう

私の友達。

ダンス・イン・ザ・ロッキーチェーン（後書き）

アン普拉グド・ニューヨーク最後の方

ブラック・スターに責任を（前書き）

「ブラック・スターに責任を」

ブラック・スターに責任を

ゴミ処理場みたいに、満腹な心。

そんなもので満たされてしまった君は、もう癒えることはないだろう
日々の仕事はゆっくりと、確実に、君を殺している

疲れ果てて、憂い顔な君たち

君達是一体、何を倒せばよいのだろう

資本か、それとも政府か。

救世主はいつまでたっても訪れない。

先人たち、きみの先生たちは

きみに二酸化炭素どころか、一酸化炭素とダイオキシンまで押し付
けて逃げていった

もう、いいでしょう。

君だけではない。

君のせいでもない。

きみは、最後のやさしさと、最後の憤慨を見せるはずだ

やさしいお父さん。優しいお母さんと一緒に
ずっと暮らしていきたかった。

もう、いいよ。

誰のせいでもない。

全ては、そう、例えば、夜空に光るあの星がいけないんだ、悪いん

だ。

ブラック・スターに責任を（後書き）

ドッキングした

プリティウーマン(前書き)

「topプリティウーマン」

プリティウーマン

お土産とおにぎりを奪う猿の姿を思い出してほしい

奪われる人は社長さんで

猿はわたしと君のことだ

思い出してほしい。

奪っているのは私たちではない

奪われているのは、私たちのほうだ。

形骸となつて肥える社会は

私たちから、担保を奪っていく。

もしかすると。

私たちが良かれと思って。

奪っているものは、債務ではないのか

恐ろしい、私たちは何を奪えばいいのか

一体何を奪えばようやく幸せになれるのか

私たちから奪っていく人たちは

あんなにも幸せそうなのに

走っていますか（前書き）

「ちゃんと歩めていますか」

走っていますか

それは今日の朝

走っている人を見かけました

その人は健康です、繰り返します、その人は大学生みたいです

ランニングではない

信号が変わりそうとか、やくざに追われているとか、そんな急いで
る走行

その人は、運動不足だった

全身の筋肉がとても無くて、姿勢が悪くなって、とても遅かった
腕を最適ふることができない、奇形のような走りかた

動物として生まれ、健常に育ち、通常に生きてきたのであるうちに
どうしてこうなってしまったのか
どうしてこうなってしまうのか

それがその人にとって最適な生き方であるから

誰も悪くない

誰も何も言えることはない

これはただの私の蔑みだ。

それでも

その人の走り方を見ていると

社会は、それを生きていかざるを得ない人たちは、やっぱりおかし

い。

ゆがんで
いるんだ。

走っていますか（後書き）

と、ほんきでおもっているかも

私の女の子（前書き）

「マイ・ガール・フリー・ソールド・ザ・ワールド」

私の女の子

わたしのかわいい女の子

昨日はどこで夜を越したのですか

わたしが後々のために、宝探しをしていたとき
その時どこで夜を越したのですか

冷たい岩肌、毛布を敷いてわたしは眠りました
隣の人びとは、岩盤が崩落して死んでいました

わたしのかわいい女の子

昨日はどこで夜を越したのですか

わたしの頬骨が割れてしまったとき
だれと腰を振っていたのですか

冷たい洞窟、その日も月に抱かれて眠りました
夢に来てくれていたんだね

わたしのかわいい女の子

きみの為に、わたしはここまで来たんだ

わたしがようやく帰れたとき
きみはお母さんになっ
ていて
幸せそうに、笑っていたね

魔王（前書き）

わが子

魔王

生家のベッドに 瘦せこけた息子がいる

時折血を吐き出し 苦しむさまは もう長くないことを物語っている
父は俯きがちに 息子の手を握っている

「息子よ どうしてこちらを向いてくれないのだ」

「お父さん 病魔がぼくを蝕み ぼくは神に召されるときがきている。
でも怖いんだ。こんな苦しみを だれにも伝えたくはなんてない」

「息子よ お前はただの風邪じゃ」

「かわいいぼうや おいでよ おもしろい遊びをしよう

こちらには きれいな花咲く川岸があるんだよ

ぼうやの着たいおべもたくさんあるよ」

「お父さん お父さん 覚えておいででしょうか。

幼少のみぎり何時もどこかへ連れてつてとせがみ 服を買ってと
ねだっていたころを」

「息子よ 周りのものが勝手に騒いでいるだけじゃ お前が死んで
しまつと」

「ぼうや いっしょにお出でよ 用意はとくに出来ている

我が娘と酒を飲み 踊り そして夜を共にするのも良いぞ
こちらはいいところだよ さあお出で」

「お父さん お父さん！ しっかりなさって下さい

ぼくの体はもうためです 自分のことです よくわかっています」

「息子よ お前を愛しておるぞ お前は死んだりなどせん 絶対だ」

「かわいくて いい子だの ぼうや じたばたしても さらうてくぞ」

「お父さん！ お父さん！ どうかお嘆きにならないで。ぼくのためにそんなことをしないで！」

父のこころ わななきつ 息子の喉を切り裂く
ふるえる我が子を抱きしめ むせび泣く

子は既に息絶えぬ

魔王（後書き）

D u l l i e b e s K i n d , k o m m , g e h m i t
m i r

ペーパーリップ(前書き)

「サイフオーン」

ペーパードリップ

わたしはおおいなるコーヒーノキエキセルサの子供であります

必死にエッジにつかまって、雨にも風にも耐えてきました

辛かったけど、今にして思えば本当にしあわせで、至福のときでありました

親元をはなれ、さあ自立しようというときに、
わたしは外国へと連れ去られてしまいました

二東三文にもならぬ貨幣で身請けされ

わたしの身は熱い鉄板にさらされてしまいました

たくさんの仲間たちと一緒に励ましあい

熱い、熱いあのころを過ごしていきました

そしてようやく自己を確立した大人になったと言えるようになり
わたしは自己を思索しながら、仕事をするようになりました

わたしの身は日に日にすり潰されていきます

わたしはやがて地に帰り、感慨なく生を忘れてゆくでしょう

あるいは死してもなお、もしくは生きることをやめたとき

わたしは洪水にさらされて、最後の希望と香りをしぼられるのかも
しれません

わたしがいま左手に持っている

ネルドリップのコーヒーのようだ

ペーパードリップ（後書き）

たいやきと共に

ふるしき(前書き)

「プロシキ」

ふるしき

おおくのひとが感じるように、きみも感じないだろうか

「前は、もつと楽しかったのに」

わたしも同様に感じている

前は本当に夢中になって、楽しくやれていたのに。

きみは、きみの興味の、ふるしきを広げすぎてしまったんだ
仕事を手広くやりすぎたとか、そんなすごい話ではない

単にきみの頭の机が散らかりすぎてしまったんだ
さあやるぞ、と机においても

ぼとりと床に落ちて、ほこりを被ってしまう

もうきみの机は、でかいものに取り換えることはできない
整理しようにも、一時置場も一杯だ
そしていらぬものなど何一つとしてない

いや、たいしたことのないものだからこそ、捨てるにも及ばない

興味が、別の興味を浸透し、殺してしまう

前は夢中でめり込めて、本当に楽しいものだったのに

机にはゴミが堆積し、愚者の塔の完成だ
落雷と津波に洗い流されるその日まで

ロールプレイングゲーム（前書き）

T
R
P
G

ロールプレイングゲーム

わたしは何になろう

そう、わたしはドラゴンだ。強く誇り高い竜にわたしはなりたい

きみは何になるのかな

そうか、きみは学者の魔法使いにするんだね

きみは正義に所属するんだね

じゃあ僕は悪にしよう。そのほうが面白い物語になるものね

サイコロをふる。出た目は外れ。

でもドラゴンは強いんだ。ひとりで世界の端までだって行けるぞ

きみはサイコロをふる。出た目は当たり。

きみはあまり動けないんだね。正義の味方も大変だ

サイコロをふる。出た目は外れ。

きみに遭遇したけど、きみは逃げてしまったね
もっと楽しもうよ、もっとワクワクしたいのに

きみはサイコロをふる。出た目は当たり。

わたしはきみと、きみの仲間に囲まれて、殺されてしまった

僕らはみんな生きている（前書き）

「生きているから何にも憚らずに歌うんだ」

僕らはみんな生きている

僕らはみんな生きている、生きているから歌うんだ

わたしは仕事をします、

わたしは仕事をします、

わたしは仕事をします。

何かおかしいのではないか

いや、何もおかしくはないけれど、きっと何かが引つかかっている

わたしのお金は、流しそうめんなのではないだろうか

わたしはお腹をすかせて口をひろげて待っているのに

何もすべり込んで来ない

もう流しそうめんも凍りはじめている

これから氷河が再来するぞ

氷河時代がやってくるんだ

お金をできるだけ溜め込んでおくんだ

はやく銀行から金を下ろせ、一銭も残さずだ

乗り遅れるな

我々が一齐にそれを行えば、ようやく社会を殺せる

わたしたちだって、やればできるんだ

僕らはみんな生きているんだ、生きているから憚らずに歌うんだ

僕らはみんな生きている（後書き）

強い気持ちを込めて歌うんだ

誰も僕を責めることはできない（前書き）

僕にその手を汚せというのか

誰も僕を責めることはできない

1995年10月23日、SFC用ソフト「タクティクスオウガ」にて

私は敵国領の収容所にいる自国民を虐殺し、敵国の残虐性のねつ造を
することを選びました。

これがずっと忘れられません。

当時の私は、何故この決断をしたのでしょうか

自国民の戦意高揚や、命の数の天秤は
考えれば考えるほど、正義も、大義も無く、理由としても成り立っ
ていないのに

現在の私は、殆どその決断はしないでしょ
うなぜならば「やりたくないから」です。

これには大義も、正義もあり、理由としても成立するのではないで
しょうか

どんなに言い繕っても、どこまでも世界の中心は自分自身です。

社会的な、大きな流れに囚われた自身は、けっして「自分」とは呼
べません

どうか盲目にはならないで

「人のため」と思い「自分のため」にやることは

「それを行ってほしい」と目論む別の誰かがいるのです。

どうか独善的にはならないで

自分のために、自分のやりたいことをやってください

ひたすらに利益を狙うのも考えものだけれど

絶対に自分が損をしないものを決断してください

正直それがいちばんありがたい、他人から見て。

誰も僕を責めることはできない（後書き）

欺き欺かれて

底の無い鞆（前書き）

「安物の靴」

底の無い鞆

右へ左へ、上りに下りと、入ったり来たり。

わたしは歩き回りました

靴は、わたしの足の裏をかばってくれているはずなのに
浅い靴底は、不親切なコンクリートと結託して、
わたしのそれを責め立てる

わたしの体重すら利用して、長い時間をかけて、
じつくりと蹴るつもりなのだ

右から左へ、上がったたり下がったり、出たり入ったり。

わたしはお金を払ってしまった

安物の財布には小銭を入れるところがないので
安物のスラックスのポケットに入れた

ポケットはわたしの財産を守ってくれるはずなのに
その薄い生地は、わたしの信用よりも、容易く破れてしまった
不親切なコンクリートは、わたしの小銭を拡散させ、
雑踏に飲み込ませてしまった

消費志向で安価を求める高級で高尚な社会は
一体きみのために何をしてくれただろう

たぶん何もしてくれないだろう

底の無い鞆（後書き）

安物な社会

マイ・ネーム・イズ（前書き）

「すりむしえいでい」

マイ・ネーム・イズ

ハイ、キッズ！

バイオレンスものは好き？（ヤー！ヤー！ヤー！）

それじゃあ半世紀かけて、ゆっくりと体をすりこぎにされる類の暴力なんかどう？（アーハー？）

他人のプライバシーを覗き込むんだ

ただでさえ他人は醜いのに

プライバシーに入り込んだ他人は
もっと劣悪になるぞ

他人の名前にセンスのなさを感じるんだ

必ずいい意味の語が一字入っているけれど

優さんは優しいのかい？賢さんは賢しらなのかい？

（雄くんは勇ましくないし、翼くんの視野は狭いよ！）

ヘイ、ボーイズ！

勝負ごとは好き？（ヤー！）

それに勝つことは？（モア！モア！）

君の名前を教えてください

君は自分を鏡で見たことも無いのに

どうして他人より優れているなんて思うんだい？

僕の名前はやせっぱちの影法師だ

さあ、帰ってママに聞いてみな

どうして僕に、こんな名前をつけたのかって

そうすると君は、君のママの喉を切り裂いて
そこでファックしながら、生まれたときのように
泣きたくなるんだろう

ウィー・オール・リブ・イン・ア（前書き）

イエローサブマリン、イエローサブマリン、イエローサブマリン

ウィー・オール・リップ・イン・ア

僕たちは密閉されているんだ
すぐに空気もなくなってしまう

だけど社会から抜け出して
一体どうやって生きていけばいいのか

まるで、潜水艦の中。
僕たちは皆、潜水艦の中で生きているんだ。

臭くて、やたらとうるさいから
いつも狭くて、他人と遠慮しあつて、邪魔しあつて、足を引っ張り
合う

もう、こりごりなんだよ
皆、嫌気がさしているんだ。

だけど、潜水艦からは出られない
皆、実は息をすることがとても好きなんだ。

潜水艦から出て、息のできる人は少ない。
ほとんどの人が生きるすべを失い、途方にくれるだろう
皆のきらいな他人たちは死んでしまう

だからこそ僕は、

この黄色い潜水艦を停止させることにしたんだ。

ここを担うこれからの子供たちを、もう生まない。
僕の子供たちだけには、こんな思いさせるものか

僕は立ち上がる

僕の子供たちだけでは、こんな思いさせるものか

背に乗って（前書き）

ヘッエライト・テエライト

背に乗って

私たちの本懐

慮ることのない黄金の穂波

みんな何処に行った

見送られることもなく

銀の竜の背に乗って

そこからの展望を美しいと感じられればいい

でも美しいと感じた瞬間には、その本懐はもう終わってしまっているんだ

きみときみの本懐との間には

今日も冷たい雨が降る

きみはきみが為になる本懐の為ならば

きみは悪にでもなる

だけど悪はただの悪であって悪の本懐ではない

それに私たちは、触れることはできないし見ることもできない

仕方がないのでにせものに手を出すも

やがて空しくなって

投げ出す

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3721x/>

地下鉄の手記

2011年11月4日10時26分発行